
暇つぶしの代償

レン太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇つぶしの代償

【Nコード】

N5292BA

【作者名】

レン太郎

【あらすじ】

暇でしようがない真夜中のコンビニバイトの最中に強盗が入ってきた。

これは面白くなってきたぞ。

時刻は、午前二時を回ったところ。草木も眠る丑三つ時だというのに、俺は眠ることなく仕事をしている。

ここは、ど田舎のコンビニ。俺はしががない深夜のコンビニ店員だ。深夜のシフトは二人で、本来ならもう一人、店員がいるはずなのだが、突然「腹が痛い」とか連絡が入る予想外の展開に、話し相手もいなくなる始末。さらに田舎な故に、こんな時間に客なんか来るはずもなく、俺は退屈な時間を過ごしていた。

あくびをしながら外を見る。相変わらず真っ暗。一応、国道沿いに面してはいるが、車はまったく通らない。コンビニの周りは田んぼに囲われ、聞こえてくるのは、地響きのような牛蛙の鳴き声だけ。

あまりにも暇なので、携帯ゲームで遊ぶとか、控室のテレビを見るときをしたいところだが、監視カメラに見張られている以上、何もすることがなくても、仕事をする振りをしなければならぬ。時給を下げられては、たまったものではないからな。

さほど汚れてもない床に、モップをゆっくりとかける。それが終われば品出し。コーラと酎ハイを一本づつ補充して終了。その後はレジに立ち、来るはずのない客を待つ振りをする。ああ、退屈で死にそうだ。

するとその時、店内にチャイムが鳴り響き、自動扉がすつと開いた。

「……客だ」そう思い顔をあげると、真っ黒な目だし帽を被った黒ずくめの人物が、俺の前に立っていた。

「いらっしや……」

どっからどう見ても、客の雰囲気を感じさせないその風貌は、当然のことながら、俺の言葉を詰まらせた。

「金を出せ」

やはり強盗。しかし、発せられた声の甲高さとその行動に、俺は度肝を抜かされていた。

声の感じからして、間違いなく女。そしてその右手には、凶器らしきものはなく、繊細で今にも折れてしまいそうな指が、俺を狙っているだけだった。

要するに、指でピストルを形作っているのだ。親指は真つすぐに天井を指し、人差し指という名の銃口は俺をロツクオン。中指を真横に突き出せば、『フレミングの右手の法則』が完成してしまうほどの勢いだ。

ここは大人しく金を渡すのが賢明だろうか。または、勇敢に立ち向かうのが善良な市民としての責務だろうか。それとも、開き直つてレジ台の上に立ち「ぼく、アルバイトオーツ！」と奇声を発するべきだろうか。ううむ、悩む。

相手は女。しかも凶器は、指鉄砲。勇敢に戦つたら、俺の勝利は間違いないだろう。いや、女といえど油断は禁物だ。もし、空手の有段者だったら、俺の鼻は見事に粉碎されてしまうかもしれない。

他の客でも来てくれれば、その客が騒ぎたて、この強盗は逃げてくれるだろうが、客が来る気配どころか、その静けさは、ますます増すばかり。ここは、俺がなんとかしなくては。

考えたあげく、やはり俺は戦うことを決意した。丸腰の女相手に屈するようでは、男がすたる。というか、暇つぶしの相手ができたと、脳の回路をポジティブに切り替え、俺も同様に、指鉄砲を強盗に突き付けた。

「フハハハ！ 馬鹿め！ こっちが丸腰だとも思つたか！」

どう見ても、お互いに丸腰である。しかし、強盗は一瞬たじろぐそぶりを見せ、わずかに後退した。ひよっとして、これは面白くないってきたかもしれない。

たじろぐそぶりは見せたものの、強盗はその後、鼻で「フツ」と笑い、目だし帽を被っていても、はつきりと読み取れる笑みをこぼし、俺にこう言った。

「じゃあ、撃ち合ってみるかい？」

ヤバイ。マジで面白い。このシチュエーションに、腹を抱えて笑いそうになっていたが、せっかくの舞台がだいなしになってしまうので、俺は下唇をギョツと噛み、必死に堪えていた。

「いいだろう」

ここはコンビニという名のブロードウェイ。主演は俺。無敵のガンマン。そして、宿敵が現れての一騎打ちだ。これから舞台は、クライマックスに突入します。どちらさまも、お見逃しなく。

二人は睨み合ったまま、息をのむ緊張が続く。いつしか牛蛙の鳴き声も止み、辺りはよりいっそうの静けさに包まれた。

「みつつ数えるよ」

宿敵はそう呟き、俺もこくりと頷いた。

「ひとつ」

どうしよう。みつつ数え終わったら、お互いに「バン！」と言って、俺は倒れるべきだろうか。

「ふたつ」

いや、ここで倒れたら、主演男優の意味がないではないか。やはり、脇役に倒れてもらうしかないな。出来るだけ、リアルな演技に期待したいものだ。

「みつつ」

と言いつつ終わった瞬間、撃とうと思っていた俺だったが、意外な展開に、それを躊躇せざるを得なくなっていた。なんと、強盗は目だし帽を脱ぎ捨て、素顔を俺にさらけ出してしまったのだ。

髪がふわりとスローモーションのようにたなびき、シャンプーの香りが俺の鼻をくすぐった。そして、目の前に現れたのは、強盗などとは思えないほどの美女。いや、まさしく女神だった。

「バン！」

女神は可愛らしくそう言い、銃口から放たれた弾丸は、俺のハートを見事に撃ち抜いた。

「お金ちょうだい」

このやり取りの後、そう言われて、出さない男がいるだろうか。いや、いないと思う。

しかし、レジから金を出すのは忍びないので、俺は自分の財布から、なけなしの一万円を女神に手渡した。

「ありがとう」

女神はそう言い残し、俺の前から立ち去っていった。しかし、俺

は警察には通報しなかった。実は、自腹を切ったのはそのためもある。

そう、女神は一万円だけでなく、俺の心までも奪ってしまっていたのだ。一万円は、暇つぶしの代金として、支払ったと考えることによろ。

もし、監視カメラの映像について聞かれでもしたら、「俺の彼女がふざけてやりました」と答えるのが、妥当ではないかと思う。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5292ba/>

暇つぶしの代償

2012年1月14日17時46分発行